

近世後期京都における御用米会所貸付方の独立と恵比須屋莊兵衛

稲 吉 昭 彦

はじめに

京都において享保末年から諸会所が設立され、その一部が貸付を行っていたことはよく知られている。⁽¹⁾ 貸付を行った京都の会所については、牧田りゑ子が京都の会所金融の成立と変遷について概括されている。⁽²⁾ また、寺尾宏二が上納会所（貸付会所）の由来や沿革、貸付方法を説明している。⁽³⁾ さらに、宇佐美英機が京都における諸会所貸付金の返済滞りの取捌仕法を明らかにされた。⁽⁴⁾ だが従来の研究では、史料上の制約からか、こうした諸会所の運営実態についてはいまだ十分に説明されていない。

そこで本稿では、諸米会所の運営実態を説明する前提作業として、御用米会所貸付方の独立過程をみていきたい。御用米会所は享保二〇年（一七三五）に京都と大津に設置されるが、大津の御用米会所については、鶴岡実枝子がその設立経過や組織

を明らかにされている。⁽⁵⁾ また、高槻泰郎が大坂市場と大津市場の関係を指摘したうえで、両者間の米価の連動を明らかにし、米穀市場の理解を深化させた。⁽⁶⁾ 一方、京都の御用米会所に関しては、鈴木直二が地方の米穀配給組織の一つとして概括している程度で、組織機構といった基本的な事柄についてもいまだ不明瞭な点が多い。したがって、まず京都御用米会所の組織について明らかにしたうえで、恵比須屋莊兵衛の御用米会所貸付方引請について考察を加えることにしたい。なお、こうした作業は洛中周辺地域の研究にも関わるだろう。

さて本論に入る前に、前川五郎左衛門家について簡単ではあるが述べておこう。⁽⁸⁾

前川五郎左衛門家は、京都六角通油小路東入町（本能寺町）に居住した町人である。近江国浅井郡川道東村を本貫地とし、初代・莊兵衛義虎（享保元年生）は延享三年（一七四六）九月に京都に出る。やがて恵比須屋莊兵衛の名で両替商を営む。義

虎には実子がなく、続く武惟・義秀・義陳は妻元（モト）の血縁者から養子を迎える。武惟と義秀についてはその活動を追うことができないが、恵比須屋莊兵衛として両替商を営んでいたと推測される。

そして、四代目・義陳（恵比須屋莊兵衛、後に前川莊兵衛、前川五郎左衛門、前川莊左衛門と改名）は寛政五年（一七九三）に醒ヶ井石田兵四郎展胤の嫡男として生まれる。義陳は、文化一二年（一八一五）に両替商・恵比須屋莊兵衛を相続したが、後述するように、文政一〇年（一八二七）に京都の御用米会所貸付方を一手に引き請けることによって、その経営を転換させることとなる。

一、御用米会所の組織

享保二〇年（一七三五）一〇月、御用米会所が京都・大津に設立される。その設立の経過については「由緒并仕来り書」と題する記録の冒頭部分に記されており、それによると以下のようであった。当時米相場が「下直」であり、米相場を「高直」にするように「御触書」を出したが、「有米多ク御拂米不捌ニ而御入札致候者茂一向無御座程之時節ニ御座候」という状況であった。そのさい、「素人之もの共々米会所相願候者有之」とあ

るように、素人のものが米会所の設立を願い出たが、京都東町奉行所が「素人之者共取計ニ而者末々ニ至り米屋共混雜之筋茂可有之哉」と考えたため、京都・大津の「米屋」に命じて御用米会所を設立させたのであった。つまり、御用米会所の設立のお願いしたいは京都・大津の「米屋」によるものであったが、それを主導したのは京都東町奉行所であった。

では、御用米会所はどのような組織であろうか。ここでは、京都の御用米会所を中心にその組織ついて概観しておきたい。

1 御用米会所役人

御用米会所の「会所役人」として御用米会所運営に携わっていたのが頭取と組頭である。人数は頭取四名（京都三名・大津一名）・組頭四名（京都三名・大津一名）で、享保二〇年（一七三五）の御用米会所設立時は頭取に坂本屋善兵衛（京都）・伏見屋嘉兵衛（京都）・奈良屋市兵衛（京都）・木屋久兵衛（大津）、組頭に多田屋治右衛門（京都）・長浜屋長兵衛（京都）・三文字屋四郎左衛門（京都）・錢屋九兵衛（大津）、が就任している。明和九年（一七七二）に大津の支配が京都町奉行から大津代官に変更となり、京都御用米会所は頭取三名・組頭三名となるが、天明元年（一七八一）、組頭を二名増員する願いが京都町奉行所に聞き届けられ、頭取三名・組頭五名となった。なお、頭取と組頭

表1 御用米会所の運営費用

	京都	大津	両会所
	銀 貫 匁	銀 貫 匁	銀 貫 匁
頭取	4,500	1,500	6,000
組頭	3,000	1,000	4,000
会所手代	600	150	750
会所中間	300	100	400
飯米代	675	225	900
筆紙墨料	525	175	700
味噌塩炭薪代	1,282.5	427.5	1,710
宿料	600	180	780
諸入用	2,250	750	3,000
合計	13,732.5	4,507.5	18,240

典拠)「会所入用大積書」(「前川五郎左衛門家文書」お-97-9)

のほかに、手代(京都四人・大津一人)と中間(京都三人・大津一人)がおり、それぞれ御用米会所の運営に従事していた。御用米会所の運営費用は、寛政一年(一七八三)二月五日付けの「会所入用大積書」と題する記録が参考になり、一年間の御用米会所運営費用をまとめたものが表1である。これによれば、頭取が一貫五〇〇匁、組頭が一貫匁、手代が一五〇匁、中間が一〇〇匁を受け取っていたこと、京都の御用米会所は大津の御用米会所の約三倍の運営費用がかかっていたことがわかる。

2 米方と貸付方

京都の御用米会所には米方と貸付方の二部門が存在し、惣代がそれぞれ六人づつ置かれていた。米方惣代的人数が六人から九人に増員されるようになるが、貸付方惣代は後述するように、文政一〇年(一八二七)二月に恵比須屋莊兵衛が貸付方の引請によって惣代の役目を終えた。

米方は、京都二条御蔵から御用米を定期的に払う定式払米と臨時の囲米払を取り扱っていた。二条御蔵から払米がある場合、頭取・組頭が米屋へ触れ流して、入札の時に米屋を召し連れて出向くことになっていた。払米の代銀は一五〇日後に精算する方式になっていたが、安永三年(一七七四)に、払米一石に銀四匁四分三厘の冥加銀を上納することによって二一〇日延長し、都合三六〇日後になった。また、米相場の立て方は、大坂の相場に運送掛物を加えた上で五畿内に引き当て、米屋は毎日立ち会った上で売買した。

貸付方は、二条御蔵御囲米代金銀と御役所御用金銀(京都町奉行所拝借金銀)を資金として運用していた。前者は元文二年(一七三七)からその運用を行い、後者の開始年代についてはわからない。

取立方法については、元金(銀)が二条御蔵御囲米代金銀か御役所御用金銀かによって異なる⁽¹⁾。

二条御蔵御困米代金銀の場合、日切は引当の有無に関係なく、十日切二度↓七日切二度↓五日切二度と規定され、この日切で弁済できなければ、「頭判」には「手錠」、「連判」には「預ケ」を科して、七日以内に弁済すると定めている。そのうえで未済により追訴したならば二十日切を申し渡す。さらに不埒の場合には、「連判」にも「手錠」を科して、五日切を申し付ける。

また、御役所御用金銀の場合、日切は十日切三度↓七日切三度↓五日切五度と規定されるが、その後の対応は引当の有無によって違ってくる。引当が有るときは、「頭判」には「手錠」、「連印」には「預ケ」を科して、五日切を申し付ける。引当が無いときは、「頭判」だけ「預ケ」で、「連判」のものには咎なしと規定される。

3 米屋仲間

米屋仲間には一八組（後に二〇組）にわかれる組の年行事と触世話人が存在し、触などの伝達は「米会所役人」から年行事へという経路となっており、会所への上納銀などは触世話人が「市中惣米屋」から取り集める仕来りであった。

「市中惣米屋」とは京都において「米商売仕者」であり、「三株」とも呼ばれていた。「三株」は湊株・地株・荷買にわかれており、つぎのように規定されていた。¹²⁾

一 湊株

二 條御蔵米其外大坂・大津湊二而直買之株、

一 地株

二 條御蔵米・大津・伏見問屋より買取、湊直買者不相成株、

一 荷買

自身荷ひ買牛馬二而者一切米穀取寄候儀不相成候、

これによれば、湊株は二条御蔵米やほかの大坂・大津において直買できる株、地株は二条御蔵米・大津・伏見の問屋から買取できるが、二条御蔵米・大坂・大津から直買ができない株、荷買は自身の荷だけ買えて、牛馬では一切米穀を取り寄せできない株、と規定していたことがわかる。

また、明和四年（一七六七）七月に東番所から米会所の頭取・組頭や湊株・地株・荷買の惣米屋、米屋年行事に三株の株料と印札料についての「申渡」がなされている。¹³⁾ここから、新規米屋仲間入りや株替わりのさいに差し出す印札料は、湊株が銀二両、地株が銀一両、荷買が銀二匁ということ、毎年七月・一二月の出銀は湊株・地株が錢三三〇文、荷買が一六〇文ということ、などがわかる。

「三株」の軒数は、御用米会所設立時の享保二〇年（一七三五）には一九五〇軒であったが、寛政九年（一七九七）には一四〇五

軒（湊株八六五軒・地株三〇八軒・荷買二三三軒）となり、さらに、文化一四年（一八一七）には一〇八一軒（湊株二九六軒・地株六四五軒・荷買一四〇軒）となり、「三株」の軒数は減少の一途をたどった。¹⁴

以上、京都の御用米会所の組織について概観してきた。京都の御用米会所は、頭取・組頭を中心とした会所役人のもと、米方と貸付方の二部門が存在した。米方は京都二条御蔵から御用米を定期的に払う定式払米と臨時の囲米払を取り扱い、貸付方は二条御蔵御囲米代金銀と御役所御用金銀（京都町奉行所拝借金銀）を運用金としていた。そして、一八組（後に二〇組）にわかれる組の年行事と触世話人が存在し、「三株」と呼ばれていた「市中惣米屋」がいた。

二、恵比須屋莊兵衛の貸付方引請

本章では、恵比須屋莊兵衛が御用米会所貸付方を引き請ける過程について検討する。

文政一〇年（一八二七）十一月八日、御用米会所頭取・組頭・米方惣代・貸附方惣代は京都町奉行所へ恵比須屋莊兵衛が御用米会所貸附方を引き請けることを願ひ出る。¹⁵

これによれば、京都町奉行所御用金銀や御囲米代金銀の貸付

については、もともと貸付方惣代がその役割を行っていたが、やがて頭取・組頭・米方惣代・貸附方惣代が「一体」で取り扱うようになり、「多人数二而取調方茂区二相成混雑仕候」という状況となった。そのため一同相談した上で、貸付方については、恵比須屋莊兵衛が「一ト手」に取り扱い、「貸附金銀滞口々御定日御取立」のほか、貸付に関することは莊兵衛から出願することと望んでいる。つまり御用米会所は、恵比須屋莊兵衛が貸付方の業務を「一ト手」に引き請けることを要求したのである。

では、恵比須屋莊兵衛が引き請ける貸付方は、御用米会所のなかでどのような位置づけだったのであろうか。

恵比須屋莊兵衛が貸付方を引き請けることについて、恵比須屋莊兵衛と頭取・組頭との間では対談に及んでいたが、頭取・組頭から「各方」に相談がなかった。そのため、文政一〇年（一八二七）十一月、恵比須屋莊兵衛は米方惣代との間で「約定一札之事」を取り交わしている。¹⁶

約定の内容は、①貸付方の勤料は一年に金二百疋で、毎暮の申請とする。②「御取立御定日」のさい「御白州」へ出向く順番は今まで通り米代滞りの次とする。③貸付方の印判は預けるが、会所で奥印し、自宅では取り扱わない。④御囲米・御払米については米方の取り扱いなので、貸付方は一切拘わらない。⑤米穀についても一切拘わらない。⑥会所の順席は頭取→組頭

↓米方惣代↓貸付方惣代の順である。⑦貸付方は市中米屋中一体の会所なので、「心得違」をしてはいけない。⑧貸付方で「不埒」なことがあり、それが会所に関係することであつたならば、すみやかに「退身」し、跡相続の者が勤める、というものである。

以上が約定の内容であるが、この主旨をまとめるとつぎのようになるだろう。

まず、御用米会所における恵比須屋莊兵衛の扱いであるが、御用米会所が恵比須屋莊兵衛に「勤料」を支払っており、また、奥印に使用する印判の持ち出しを禁止し、会所内で業務することを厳命している。ここから、御用米会所は恵比須屋莊兵衛が貸付方の業務を「一ト手」に担うが、あくまでも会所の一員として扱おうとしていることがうかがえる。

つぎに、御用米会所における貸付方の序列については、米方の次席であり、御用米会所のなかでは頭取↓組頭↓米方惣代↓貸付方惣代の順となるので、末席にあたる。また、「御取立御定日」といった貸付方に関する業務においても、米方より優先されることはなかった。

そして、米方が担う御囲米・御払米といった米穀については、恵比須屋莊兵衛の関与を一切認めないこととなっていた。米方は、恵比須屋莊兵衛が請け負ったのは貸付方の業務であり、米

方の業務への介入を防ごうとしていたと考えられる。

このように、貸付方は御用米会所のなかで「末席」に位置づけられ、恵比須屋莊兵衛は会所の一員となった。

同年二月三日、願書が聞き届けられ、同月五日に御用米会所と恵比須屋莊兵衛との間で、「取極」の書付を交わした。¹⁷⁾

その内容は、①恵比須屋莊兵衛が貸付方の「引請」に銀一〇貫目を会所へ差し出したので、会所はそれを受け取った。②毎年十一月に米会所へ銀二貫五百目を出銀する。③頭取・組頭の連印が必要ならば何時にても連印する。④貸付方の取り締まりや貸付方のためならば、何時にても会所一同連印する。⑤貸付方に使用する印判や割印帳などを預け、また、そのほか必要な書物や帳面などがあつたならば、何時にても預ける、というものである。

この書付は、御用米会所側からみれば、恵比須屋莊兵衛に貸付方を託すことにより、毎年安定した収入を、一方、恵比須屋莊兵衛側からみれば、貸付業務における会所の協力を獲得しており、両者にとって利得のある「取極」であつたといえるだろう。

しかし、文政一〇年（一八二七）二月一六日、下方米屋惣代として触世話人が、恵比須屋莊兵衛の貸付方引請について、頭取・組頭や米方惣代、年行事や貸付方の恵比須屋莊兵衛とそ

の息子前田屋又吉等を相手取り、京都町奉行所に訴え出た。⁽¹⁸⁾すなわち、「米会所貸附を莊兵衛并又吉江永代讓渡候儀、不容易成儀二付、早々取戻是迄仕来り通り会所役之者実意二取斗、米屋一統永続候様被為仰付被下候得者、広大之御慈悲与難有仕合可奉存候」とあるように、莊兵衛・又吉から御用米会所貸付方を取り戻し、従来通りに会所役人が取り扱うことを願った。

同月二七日、済状が差し出されるが、これによれば、「会所役人・年行事等」と「対談」に及んだところ、「右貸附方永代相讓候与申訳ニ而者曾而無御座、是迄会所役人共一体ニ而取扱候得共、多人数ニ而調方区ニ相成混雜仕候二付、莊兵衛一ト手ニ為取扱候得者、取メ茂宜会所相統之基ニ付、莊兵衛江為相任候儀ニ而其段 御役所様江奉願候儀」ということで、「下方米屋共、申分等一切無御座」となった。そして、「莊兵衛ハ会所表借財方為手当差出置候銀拾貫目」は「米屋共一同江申請」とし、「是迄印料銀不勘定ニ而茂御座候二付、印料者莊兵衛江為引請、右為代り年々同人ハ差出候銀貳貫五百目を、此度相改三貫目宛会所へ差出候」とあるように、印料は莊兵衛が引き請け、出銀を銀二貫五〇〇目から銀三貫目に改め、それを会所へ差し出すこととした。

このように、米屋仲間の反対があらながらも、恵比須屋莊兵衛が貸付方の業務を「一ト手」に引き請けることになった。

ところで、なぜ恵比須屋莊兵衛が貸付方の業務を引き請けることになったのか。御用米会所は、表向の理由として、取調方の「混雜」の解消を上げている。しかし、貸付方が当時おかれていた状況をみると、その内実が浮かび上がってくる。つぎに掲げる史料は、寛政五年（一七九三）一二月、御用米会所の頭取・組頭・貸付方から京都町奉行所へ提出した願書の一節である。⁽²⁰⁾

一米会所拝借金銀之儀、近年不納仕不埒ニ付、此度私共江貸附証文取集差出返納方之勘弁仕可申上旨被 仰付候ニ付、則貸附方相糺候處、当時米会所ニ少々斗有之候貸附証文名前之者共、多分去ル申年正月晦日火災後、家出或者死去等、其外所々江散在行衛不相知者共ニ而、用立候証文者、誠ニ聊之儀ニ而上納手便ニ可相成程之儀無御座、去ル卯年御困米御払米代銀上納ニ差迫候節、向々貸附銀過急ニ取立茂出来不申甚差迫候ニ付、右貸附証文を向々銀主共江為引当相渡、銀子操替三面仕、漸御払米代銀上納仕候處、火災之節諸帳面類焼失仕候故、右証文茂何れ之銀子江相渡置候与申儀相分不申、殊取替銀済方之ため、為引当相渡置候証文故、銀子返済不致候而者、右証文差戻シ不申、旁証文取集差上候儀茂出来かたく当惑仕候、
(後略)

これによれば、「拝借金銀」の不納について、「火災」により、貸付証文にある名前の者が家出や死亡、行方知らずとなり、回収できなくなったことを理由としてあげている。また、貸付証文の差出について、天明三年（一七八三）の上納のさい、貸付証文を引当として銀子を工面し上納したが、「火災」により、貸付証文に関する諸帳面の焼失したため、それでもできなくなったと説明している。

ここでいう「火災」とは、いわゆる天明大火のことである。天明大火とは京都でおきた大規模な火事のこと、天明八年（一七八八）正月晦日に鴨川の東の「どんぐり辻子」から出火してから、二月三日に鎮火するまでの三日間にわたり京都市中のほぼ全域を焼失した災害である。天明大火に関しては、天明大火とその後に生じた様々な事態を分析した安国良一の研究がある。⁽²¹⁾安国は、大火によって家屋敷が焼失すると、それを担保とする市中の金融が逼迫する事態を招いたと指摘する。

「拝借金銀」とは、京都町奉行所から「拝借」という名目で貸し出された金銀のことで、御用米会所貸付方による貸付金のもととなっていた。貸付金の返済滞りに関してはその規定が整備されていたが、天明大火によって借り手が死亡・家出・行方知らずとなったため、規定通りに弁済されなかったと考えられる。つまり、天明大火が借り手の家出・死亡や証文・帳面の焼失を

招き、それが米会所貸付方の運営を圧迫し、「拝借金銀」の不納につながったのである。

京都町奉行所「拝借金銀」の元高と滞り利足を示したのが表2である。これによれば、元高が金八五七両三分二朱・永一〇〇文、銀一〇四七貫八三二匁四厘九毛九弗で、天明六年（一七八六）二月から寛政四年（一七九二）二月までの滞り利足が金二二両三分・永二〇〇文六分四毛、銀三四九貫九八二匁六分八毛であった。

このような状況をふまえた上で、「右元金銀之内江沓ヶ年二銀貳拾貫目宛、毎年十二月廿五日迄二無遅滞上納可仕候、右滞利足之儀者、元金銀

皆済仕候上、急度上納可仕候、尤^(寛政四年)子年以來之滞利足者、御免被成下

候様奉願上候事」とあるように、元金銀分は京都町奉行所へ銀一〇貫目づつ（合わせて銀二〇貫目を）年賦

表2 京都町奉行所拝借高と滞利足

項目	金	銀	備考
元高	857 両 3 分 2 朱 永 100 文	1047 貫 831 匁 4 厘 9 毛 9 弗	
滞利足	22 両 永 200 文 6 分 4 毛	349 貫 982 匁 6 分 8 毛	天明6年2月～ 寛政4年12月
合計	880 両 3 分 2 朱、 永 54 文 6 分 4 毛	1497 貫 813 匁 6 分 5 厘 7 毛 9 弗	

典拠)「拝借滞年賦上納其外諸願之下書并被仰渡之写」(「前川五郎左衛門家文書」ソ-154)

上納すること、滞り利足分は元金銀を皆済したうえで上納すること、寛政四年（一七九二）以来の滞利足の免除してほしいことを願ひ出る。なお、上記の願いとあわせて、「近年米会所役人共病氣之者多、取斗方行届不申候儀」のため、「以来米会所仕法等茂相改」を願ひ出ている。²³⁾

年賦上納の願ひは、寛政八年（一七九六）六月に聞き届けられ、寛政八年度分から年賦上納（寛政八年度は半期分の銀一〇貫目、寛政九年度から銀二〇貫目を上納）されるようになった。²⁴⁾京都町奉行所への年賦上納は当初滞りなく行われていたが、文化九年度（東）、文化一〇年度（東）、文化一三年度（東・西）は二月までに上納できず滞りようになる（表3）。特に文化一三年度分は翌年の文化一四年（一八一七）七月三日まで上納できなかった。

そして、六日後の文化一四年（一八一七）七月九日、御用米会所の頭取・組頭・米方惣代及び米屋年行事は京都町奉行所へ年賦上納の減免を求める願書を提出した。²⁵⁾

一 当会所之儀、前々広大之蒙 御慈悲相続仕来候段、冥加至極難有仕合ニ奉存候、然ル處両 御役所様々多分之拜借金銀返納方相滞候付、御取調被成下、御憐愍を以寛政年中々無利足年限年賦上納被 仰付、年々銀拾貫目宛両 御役所様江、都合式拾貫目宛年賦上納仕来候処、米屋共

儀元来困窮之上近年別而困窮仕軒数も次第二相減、其上右返上納割合銀高出シ兼候者も多ク有之候付、上納銀都合不仕候間、種々才覚借入銀等仕、去子年迄者無滞年賦上納仕候得共、困窮之会所二而外二銀子之出方無之、年々借財相嵩、利足二被追、元銀返済之期も無御座、何れ米商売仕候もの共一統之集銀を以取賄仕候外無御座候処、米屋共出銀集り兼候付、迎も此上右拾貫目宛年々上納可仕手便も無御座、其上近來田舎米多、御当地江入込米捌方不宜候二付、毎々難有御触流等被成下結構二被仰付被下候得共、抜ケ売買仕候もの多ク御座候付、度々奉願御吟味被成下候得共相止不申候哉、捌方薄ク米屋共一統衰微二而、只今之姿二而者会所相続難仕、迎茂毎年式拾貫目宛上納之儀、才覚仕方も無御座、甚以難渋至極奉存候、是迄厚蒙 御憐愍結構二被 仰付置候上、上納不足仕候儀者、何共歎敷奉恐入候儀二御座候得共、前段奉申上候、返々仕合ニ御座候得者、此上年々上納不足之分足シ銀之手当も無御座候得者不得止事、不顧恐歎御願奉申上候、右式拾貫目上納銀当丑年分々十五ヶ年之間御減少被成下、壹ヶ年二片 御役所様江銀五貫目、両 御役所様江銀拾貫目宛奉上納度奉願上候、此段幾重二も格別之御憐愍を以右之趣御聞届ケ被成下候ハ、右年限之

表3 京都町奉行所拝借金年賦上納金

京都町奉行所（東）				京都町奉行所（西）			
年	月	日	上納額	年	月	日	上納額
寛政8	12	13	元銀5貫目	寛政8	12		銀1貫650目
寛政9	12	9	元銀10貫目	寛政8	12		銀1貫650目
寛政10	12	8	元銀10貫目	寛政8	12		銀1貫700目
寛政11	12	8	元銀10貫目	寛政9	12		銀1貫350目
寛政12	12	19	元銀10貫目	寛政9	12		銀8貫650目
享和元	12	26	元銀10貫目	寛政10	12		銀10貫目
享和2	12	18	元金160両	寛政11	12		銀10貫目
享和3	12	18	元銀10貫目	寛政12	12		銀10貫目
文化元	12	18	元銀10貫目	享和元	12		銀10貫目
文化2	12	23	元銀10貫目	享和2	12		銀10貫目
文化3	12	23	元銀10貫目	享和3	12		銀10貫目
文化4	12	23	元銀10貫目	文化元	12		銀10貫目
文化5	12	23	元銀10貫目	文化2	12		銀10貫目
文化6	12	23	元銀10貫目	文化3	12		銀10貫目
文化7	12	27	元銀10貫目	文化4	12		銀10貫目
文化8	12	26	元銀10貫目	文化5	12		銀10貫目
文化9	12	25	元銀5貫目	文化6	12		銀10貫目
文化10	1	25	元銀5貫目	文化7	12	25	銀10貫目
文化10	1	25	利銀60目	文化8	12	26	銀10貫目
文化10	12	26	元銀5貫500目	文化9	12	25	銀10貫目
文化11	1	25	元銀4貫500目	文化10	12	28	銀10貫目
文化11	1	25	利銀54目	文化11	12	27	銀10貫目
文化11	12	26	元銀10貫目	文化12	12	晦	銀10貫目
文化12	12	28	元銀5貫目	文化13	12	27	銀6貫目
文化12	12	晦	元銀5貫目	文化14	7	3	銀4貫目
文化13	12	27	元銀6貫目	文化14	7	3	(利)銀168目
文化14	7	3	元銀4貫目	文化14	12	27	銀5貫目
文化14	7	3	利銀168目	文政元	12	28	銀5貫目
文化14	12	26	元銀5貫目	文政2	12	22	銀5貫目
文政元	12	28	元銀5貫目	文政3	12	24	銀5貫目
文政2	12	23	元銀5貫目	文政4	12	26	銀5貫目
文政3	12	24	元銀5貫目	文政5	12	23	銀5貫目
文政4	12	26	元銀5貫目	文政6	12	20	銀5貫目
文政5	12	23	元銀5貫目	文政7	12	19	銀5貫目
文政6	12	20	元銀5貫目	文政8	12	15	銀5貫目
文政7	12	19	元銀5貫目	文政9	12	18	銀5貫目
文政8	12	17	元銀5貫目	文政10	12	14	銀5貫目
文政9	12	18	元銀5貫目	文政11	12	26	銀5貫目
文政10	12	14	元銀5貫目	文政12	12	26	銀5貫目
文政11	12	27	元銀5貫目	天保元	12	23	銀5貫目
文政12	12	26	元銀5貫目	天保2	12	24	銀5貫目
天保元	12	23	元銀5貫目	天保3	12	24	銀6貫目
天保2	12	24	元銀5貫目	天保4	4	17	銀4貫目
天保3	12	24	元銀6貫目				
天保4	4	18	元銀4貫目				

典拠)「前川五郎左衛門家文書」ソ-143、144

間ニ会所借銀濟方仕、十六ヶ年目今は是迄之に通上納銀無滞、
而 御役所様江式拾貫目宛相納メ会所相続可仕与、私共
者不及申、米屋共一統広大之御救与如何計冥加至極難有
仕合ニ可奉存候、以上、

願書では、まず寛政年間における銀二〇貫目を京都町奉行所へ年賦上納することについて説明した上で、米屋の軒数が減少し、出銀しない者が多くいること、田舎から京都に米を持ち込んで抜け売買するものが多くなり、「捌方」の薄くなった米屋が「衰微」したことをあげて、毎年銀二〇貫目を上納するのは困難ということを出している。そして、これまで京都町奉行所への年賦上納が銀二〇貫目であったが、「丑年分」（文化一四年）からの一五年間は京都東西町奉行所へ銀五貫目づつ（合わせて銀一〇貫目）の年賦上納を願ひ出ている。

先に述べた通り、米屋仲間は御用米会所設立時の享保二〇年（一七三五）には一九五〇軒あったが、文化一四年（一八一七）には一〇八一軒にまで減少していた。そのため、米屋から取り集める出銀が減少していたと推測される。また、田舎米の抜け売買については、文化九年（一八一二）・文化一三年（一八一六）に「諸向田舎々持込候米穀等直買増長いたし候趣相聞へ、不埒之至ニ候」という旨を触れ流しているが、天明四年（一七八四）二月に「天明年中相続米穀高直ニ而下々難儀之段相聞候ニ付、

同四^(天明)辰年秋作収納迄ハ田舎米買取候儀差免候間、前々之通差留候儀ハ追而可相触旨」と、寛政一二年に「同八^(天明)申年京多大災ニ付、諸株諸仲間等追而沙汰候迄差免、諸商買等可致手広旨相触、尚亦諸株諸仲間等大災已前之趣を以申付候間、仲間外之者心得違致間敷、追々元商売へ可立戻段」と、触れ置いているように、「米穀高直」で「下々難儀」のため、一時的ではあるが、田舎米の買取を免じたこと、天明大火を契機に仲間以外の者が商売するようになったことがその背景にあったと考えられる。⁽²⁶⁾

年賦上納減免の願ひは聞き届けられ、文化一四年（一八一七）からの一五年間は京都町奉行所へ銀一〇貫目の年賦上納となる。しかし、貸付方の運営状況は決して順調ではなかった。表4・5は文政四年（一八二二）から同九年（一八二六）までの印料寄高と貸付方諸入用を示したものである。印料寄高一年分の平均は二貫九三二匁八分七厘五毛であるのに対して、貸付方諸入用一年分は銀六貫九八匁である。印料寄高から貸付方諸入用を差し引くと四貫六五匁一分三厘（厘の単位で四捨五入）不足していた。つまり、貸付方の運営は欠損（赤字）が生じる状態だったのである。

このように、貸付方は天明大火を契機に「困窮」してしまつた。それは京都町奉行所が二度に渡って対策したにも関わらず、そこから抜け出していないところまで落ちていた。御用米会所は

表4 文化4年～文化9年の印料寄高

年	印料寄高
文政4年	銀2貫123匁
文政5年	銀3貫254匁8分2厘
文政6年	銀3貫43匁4分7厘
文政7年	銀3貫145匁3分7厘
文政8年	銀3貫693匁6分
文政9年	銀2貫236匁9分9厘
合計	銀17貫597匁2分5厘
年平均	銀2貫932匁8分7厘5毛

典拠)「前川五郎左衛門家文書」お-97-5

表5 1年間の諸入用銀

項目	金額
年頭八朔暑寒五節句	金30両 (代銀1貫920匁)
手代1人半、給金1年分	金27両 (代銀1貫728匁)
下男1人、給金1年分	銀150匁
筆紙墨代1年分	銀1貫200匁
手代1人半・下男1人、飯代1年分	銀720匁
貸附惣代袴料	金9両 (代銀576匁)
御拝借(年頭八朔暑寒入用)	金6両 (代銀384匁)
御拝借(年頭八朔暑寒入用)	金5両 (代銀320匁)
合計	銀6貫998匁

典拠)「前川五郎左衛門家文書」お-97-5

恵比須屋莊兵衛に貸付方の請負として銀一〇貫目の支払いと出金を要求していることから、御用米会所は不採算部門である貸付方の業務を請け負わせて、出銀による収入を得ようとしていたと考えられる。一方、恵比須屋莊兵衛は両替商の運営により財を築いており、御用米会所の要求に応じることができたと考えられる。米屋仲間による出訴がありながらも、恵比須屋莊兵衛は御用米会所貸付方の業務を請け負うこととなったのである。

しかし恵比須屋莊兵衛の目的は、貸付方の業務を請け負うことではなかった。御用米会所から貸付方を「独立」させ、貸付方そのものを掌握することにあった。そして、恵比須屋莊兵衛は貸付方の「独立」に向けて動き出す。

文政一二年(一八二九)三月十一日、御用米会所の頭取・組頭、米方惣代、貸付方の恵比須屋莊兵衛は京都町奉行所に会所の引き別れを願い出る^②。これによれば、「米会所之儀」について、「米方并貸附方与一ト会所ニ罷在滞口々引合等仕候節、多人数入込混雑仕、是迄間違等出来兼而難渋心配仕」という理由をあげ、「貸附方会所之儀者、六角通油小路東江入ル町江引別レ、米方之儀者、是迄之通新シ町御池下ル町ニ罷在、御用向等相勤申度奉存候ニ付、乍恐奉願上候」とあるように、貸付方は「六角通油小路東江入ル町」に「引別」とし、米方は「是迄之通新

シ町御池下ル町」にするようお願いした。

またこれと同時に、御用米会所の頭取・組頭・米方惣代と恵比須屋莊兵衛との間でも「一札」を取り交わしており、右のように貸付方を「引別」とした上で、「左候得者無益之費も相減可申候間、年々御出銀三貫匁之處、当丑年の銀式貫匁相増都合五貫目宛御出銀被下候得者、米方之助ニ相成候二付」とあるように、出銀が三貫目から五貫目に増加するように求めている。

これによって貸付方が、新町御池下ル町から六角通油小路東入町に移ったが、この場所は恵比須屋莊兵衛の自宅であった。また、出銀の増加は御用米会所と貸付方を「引別」とする条件だったと考えられる。

そして文政一二年（一八二九）十一月、御用米会所の頭取・組頭、米方惣代らは恵比須屋莊兵衛から銀六〇貫目を受け取った。⁽²⁹⁾この証文の内容は「此度書面之銀高御出銀被下候取者」として、「当会所差掛銀子入用之儀出来仕候二付」をあげ、「右年々銀五貫目宛之御出銀相止、此度書面之銀子御出銀被下候得者、猶更会所表勝手ニ茂相成候二付御頼申入候処、是又御承知被下、則書面之銀高御渡被下慥ニ請取申処相違無御座候、然ル上者右年々銀五貫目宛之御出銀者勿論、向後米方会所如何様之難渋出来仕候共、御出銀等之儀決而御頼御談申間敷候」とある。すなわち、御用米会所の頭取・組頭・米方惣代らは銀六〇貫目を受

け取るかわりに、年々銀五貫目の出銀を停止し、今後において米方会所が難渋に及んでも出銀などは依頼しないことを恵比須屋莊兵衛と誓約したのである。

また、奥書に「毎年市中惣米を御上納銀取集候得共、三井組ニ而借用罷在候御為替銀并 紀州様御貸附其外口々ニ而借用罷在候、借財之利足銀等二引方多、毎年両御役所様江御上納二手支難渋仕候得共、聊銀子之出方茂無御座」とあるように、御用米会所側が恵比須屋莊兵衛に出銀を求めたのは、三井組などからの借財の「利足」によって、京都町奉行所への年賦上納の滞りを招いていたからであり、「今度銀六拾貫目御出銀被下、御蔭を以借財方夫々返済仕、一同安心大慶仕候」とあるように、恵比須屋莊兵衛から受け取った銀六〇貫目を借財の返済にあてたのであった。

文政一二年（一八二九）二月五日、恵比須屋莊兵衛は京都町奉行所に「御触流」を願い出で、⁽³⁰⁾同月一六日につきのような町触が出される。⁽³¹⁾

御用米会所

恵比須屋

莊兵衛

右者新シ町御池下ル町米会所ニ而貸附方之儀者、右莊兵衛引請罷在候処、米方并貸附方一ト会所ニ而者及混雜候付、

貸附方会所之儀者、当三月より六角通油小路東二入町江引別候間、是迄金銀借請人共者勿論以来借請度もの共、右会所江罷越可致相对候、此旨洛中洛外江不洩様可申通事、

丑十二月十六日

新町御池下ル町にある米会所の貸付方の会所は三月から六角通油小路東入町へ引き別れたので、金銀の借請人や借り請けた人は六角通油小路東入町の会所へ出向き相對いたすべきことを洛中洛外へ触れ知らせている。これによって、恵比須屋莊兵衛による貸付方の「独立」が完了するのである。

これまで恵比須屋莊兵衛が貸付方を引き請ける過程についてみてきたが、それはつぎの三段階に区別できるだろう（図1）。

第Ⅰ期（文政一〇年一二月から文政一二年三月まで）は、恵比須屋莊兵衛が貸付方の業務を「一ト手」に引き請けた段階である。この段階では、恵比須屋莊兵衛は御用米会所から「勤料」を受け取り、御用米会所の一員として扱われている。また、自宅に印判を持ち帰ることを禁じており、恵比須屋莊兵衛が御用米会所に勤める形式であった。御用米会所側からすれば、不採算部門であった貸付方の切り離しと貸付方の業務の引請にとまなう銀の授受という利点があった。そのため、恵比須屋莊兵衛に貸付方の業務を「一ト手」に担わせたのだらう。

第Ⅱ期（文政一二年三月から文政一二年一月まで）は、御

用米会所と貸付方の場所が「引別」となる段階である。すなわち、貸付方が御用米会所のある新町御池下ル町から恵比須屋莊兵衛の居住地である六角通油小路東入町に移った段階である。この段階は御用米会所と貸付方の場所が分離した状態となったが、御用米会所に出銀しており、組織としては分離していない。

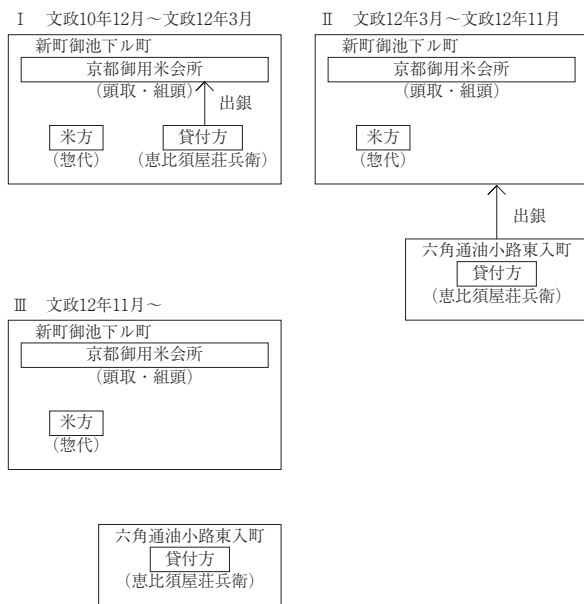


図1 京都御用米会所の引請過程

兵衛が御用米会所に銀六〇貫目を支払って、出銀を止めたことは、貸付方が御用米会所から組織的に分離したことを意味する。

また、文政一二年（一八二九）一月一六日に御用米会所と貸付方が引き別れたという町触が出されたが、これ以降、御用米会所と貸付方は別々の会所として認識されたと考えられる。このように貸付方が御用米会所から場所・組織的に分離したことは、貸付方が御用米会所から「独立」したといえるだろう。

この背景は、天明大火をきっかけに御用米会所（特に貸付方）が「困窮」したこと、恵比須屋莊兵衛が両替商により財を得ていたこと、があげられる。すなわち、貸付方の弱体化と恵比須屋莊兵衛の登場がリンクしたことにより、会所の金融部門である貸付方が名称だけを残し、恵比須屋莊兵衛という新興町人のものになったのである。これは会所組織の分解、新興町人の会所掌握を意味している。

藤田覚は著書『田沼時代』のなかで、「創意工夫をこらした新たな試みをする人びと、斬新な政策提言をおこないそれを政策化した人びとたち」を「山師」と評して、幕府政治のなかで活躍した、あるいは活躍できた「山師」たちを取り上げ、田沼時代の全体像を描いている。³²天明大火によって生じた会所組織の弱体化につけ込み、貸付方の「独立」に成功した恵比須屋莊兵衛は、遅れてきた「山師」なのかもしれない。

おわりに——恵比須屋莊兵衛から前川五郎左衛門へ——

本稿では、京都御用米会所の独立過程とそれを行った恵比須屋莊兵衛について考察した。

享保二〇年一二月、御用米会所は京都と大津に設立された。京都御用米会所の組織は頭取・組頭の会所役人のもと、米方と貸付方の二部門を有していた。米方は、京都二条御蔵から御用米を定期的に払う定式払米と臨時の囲米払を取り扱っており、貸付方は、二条御蔵御囲米代金銀と御役所御用金銀（京都町奉行所拝借金銀）を資金として貸付を行っていた。

このうち貸付方は、天明大火を契機にその運用が行き詰まるようになり、京都町奉行所拝借金銀の返済が滞るようになった。京都町奉行所は寛政八年（一七九六）に銀二〇貫目づつの年賦上納とし、さらに文化一四年（一八一七）には銀一〇貫目づつに減免するという対応をとる。しかし、この対応にも関わらず貸付方は赤字体質から抜け出すことができず、不採算部門となってしまった。

京都御用米会所は、文政一〇年（一八二七）十一月に恵比須屋莊兵衛が貸付方の業務を「一ト手」に担うことを京都町奉行所に申し、同年一二月に聞き届けられる。当初、恵比須屋莊兵衛は貸付方の業務を担うだけであったが、文政一二年

(一八二九) 三月に場所の分離、同年一〇月に組織からの分離と、御用米会所から貸付方を段階的に切り離していった。そして、同年一二月に米方と貸付方が分離したという内容の町触が出されたことによって、御用米会所と貸付方は別々の会所として認識されるようになり、貸付方は御用米会所から「独立」したのである。

ところで文政一三年(一八三〇)六月朔日、御用米会所貸付方の恵比須屋莊兵衛は「貸付一条」のさいに「前川」という苗字を名乗り、「御取立之節」に「上椽」へ出向くことを願ひ出て、それが聞き届けられるようになる³³⁾。また、「公辺向二同名之方在之差支候付」ということから、天保三年(一八三二)七月二九日に前川莊兵衛から前川五郎左衛門と改名することを京都町奉行所に届け出る³⁵⁾。そして、前川五郎左衛門は御用米会所貸付方の「改革」に乗り出すようになる。それは御定書の制定や証書の文言、口入仲間の統制など様々な面に及ぶ。

また、すでに宇佐美英機が指摘しているように、天保一三年(一八四二)二月、「家質改会所」「荒道具質会所」「銭小貸会所」「米会所」「同貸附方」「六条新地米売買会所」「貸附会所」「長崎御蔵払代銀手当貸附会所」の取り払いを申し渡される³⁶⁾。これにより、「米会所貸附方」は「元米会所貸附方」となり、「米会所貸附方」としての権限を失ってしまう。そして、前川五郎

左衛門は復権のため様々な行動に出る。

これら前川五郎左衛門による御用米会所貸付方の運営については、稿を改めて論じることとしたい。

註

- (1) 塚本明「近世中期京都の都市構造の転換」(『史林』七〇巻五号、一九八七年)、同「都市構造の転換」(『岩波講座 日本通史 近世4』第一四巻、岩波書店、一九九五年)。
- (2) 牧田りゑ子「近世後期の京都における会所金融」(『近江歴史・考古論集』滋賀大学教育学部歴史学研究室、一九九六年)。
- (3) 寺尾宏二「京都貸付会所考」(『駒沢大学文学部研究紀要』二三号、一九六五年)。
- (4) 宇佐美英機『近世京都の金銀出入と社会慣習』(清文堂出版、二〇〇八年)。
- (5) 鶴岡実枝子「近世米穀取引市場としての大津」(『史料館研究紀要』五号、一九七二年)。
- (6) 高槻泰郎「近世米市場の形成と展開―幕府司法と堂島米会所の発展―」(名古屋大学出版会、二〇一二年)。
- (7) 鈴木直二「徳川時代の米穀配給組織」(厳松堂書店、一九三八一年)。
- (8) 竹下喜久男「前川家について」(『前川五郎左衛門家文書目録』第一巻、二〇〇三年)、『京都本能寺町 前川五郎左衛門家文書目録』第四巻解題第二節「前川義陳の活動とその生涯(二〇一二年)」を参照。前川五郎左衛門の先行研究は尾脇秀和「幕末期京糸割符の動向とその終焉―「糸割符」の身分格式と特権―」(『日

本史研究』五九九号、二〇二二年）がある。

- (9) 「由緒并仕来り書」(佛教大学図書館所蔵 前川五郎左衛門家文書 う六六)。前川五郎左衛門家文書は『京都本能寺町 前川五郎左衛門家文書目録』第一巻「第四卷(二〇〇三、二〇〇四、二〇〇六、二〇一二)がある。以下前川五郎左衛門家文書については調査番号(整理番号)を付す。なお、鶴岡美枝子前掲註(5) 論文や高槻泰郎前掲註(6) 著書では、享保一三年(一七二八)に設立した米売買会所が享保二〇年に御用米会所へと改組されたと理解される。しかし、米売買会所は天保一三年(一八四二)「二月、「米会所」・「同貸付方」などとともに取り払いになるまで存続しており、御用米会所と米売買会所とは別々の会所である。

- (10) 「会所入用大積書」(前川五郎左衛門家文書 お九七一九)。
(11) 「虎之巻」(前川五郎左衛門家文書 あ四六一六)、「御開米代金銀返済相滞候分御日切被仰付方一件」(前川五郎左衛門家文書 お九六一二)、「御役所御用金銀引当之有無ニ不拘十一ヶ度目頭判手錠連印之者御預被仰付候例」(前川五郎左衛門家文書 お九六一三)、宇佐美英機前掲註(4) 著書を参照。なお、文政一三年(一八三〇)に恵比須屋莊兵衛が取立方法を変更しているが、これについては別の機会に論じたい。
- (12) 「由緒并仕来り書」(前川五郎左衛門家文書 う六六所収)。
(13) 明和四年七月「申渡」(前川五郎左衛門家文書 ア四五一二)。
(14) 文政元年一月「乍恐奉願口上書」(前川五郎左衛門家文書 え五三二)、文政元年二月「乍恐奉願口上書」(前川五郎左衛門家文書 あ四六一二)。
- (15) 文政一〇年十一月八日「乍恐奉願口上書」(前川五郎左衛門家文書 う七六所収)。う七六は京都町奉行所に提出した願書を

書き留めたものである。

- (16) 文政一〇年十一月「約定一札之事」(前川五郎左衛門家文書 ア四七一八)。
(17) 文政一〇年二月五日「差入申為任証文之事」(前川五郎左衛門家文書 ア四七一四)。
(18) 文政一〇年二月一日「乍恐奉願口上書」(前川五郎左衛門家文書 う七六所収)。
(19) 文政一〇年二月二七日「乍恐濟状」(前川五郎左衛門家文書 う七六所収)。
(20) 寛政五年二月「乍恐奉願口上書」(前川五郎左衛門家文書 ソ一五四所収)。
(21) 安国良一「京都天明大火研究序説」(『日本史研究』四二二号、一九九六年)。
(22) 宇佐美英機前掲註(4) 著書。
(23) 納方の仕法と仕法改めの内容は、別の機会に論じる。
(24) 寛政八年六月「申渡」(前川五郎左衛門家文書 ソ一五四所収)。
(25) 文化一四年七月九日「乍恐奉願口上書」(前川五郎左衛門家文書 ソ一三六)。
(26) 『京都町触集成』第九卷九七六号。
(27) 文政二年三月一日「乍恐奉願口上書」(前川五郎左衛門家文書 う七六所収)。
(28) 文政二年三月「二札」(前川五郎左衛門家文書 ア四七一八)。
(29) 文政二年十一月「請取申銀子之事」(前川五郎左衛門家文書 ア四七一三)。
(30) 文政二年十一月「乍恐奉願口上書」(前川五郎左衛門家文書

う七六所収)。

- (31) 文政一二年二月一六日「御触写」(前川五郎左衛門家文書う七六所収)。なお、これは『京都町触集成』第十卷一〇七七号とほぼ同様の内容である。

- (32) 藤田覚『日本近世の歴史 4 田沼時代』(吉川弘文館、二〇一二年)。

- (33) 文政一三年六月初日「乍恐奉願口上書」(前川五郎左衛門家文書う七六所収)。白洲での座席の意味合いは、尾脇秀和「吟味座席と身分・職分」(『日本歴史』七六六号、二〇一二年)を参照されたい。

- (34) 嘉永七年三月「前川五郎左衛門家過去帳」(前川五郎左衛門家文書 ネ四)。

- (35) 天保三年七月二九日「乍恐口上書」(前川五郎左衛門家文書う七六所収)。

- (36) 『京都町触集成』第十一卷六七六号、宇佐美英機前掲註(4)著書。

〔付記〕史料の使用・閲覧にあたり、佛教大学図書館に格別の御高配を得た。記して謝意を表したい。

(イナヨシ アキヒコ 研究協力者)